SHOW-HEYシネマルーム

★★★★★

こんにちは、母さん

2023 年／日本映画
配給：松竹／110 分

2023（令和５）年７月 21 日鑑賞	松竹試写室

Data　２０２３－８７

監督：山田洋次
脚本：山田洋次／朝原雄三
原作：永井愛『こんにちは、母さん』
出演：吉永小百合／大泉洋／永野芽郁／ＹＯＵ／枝元萌／宮藤官九郎／田中泯／寺尾聰

みどころ

私は２０２４年３月末に弁護士生活５０年を迎えるが、山田洋次は９０歳を超えて監督９０本目を、女優生活６０年を超えた吉永小百合は１２３本目の本作に挑戦！この２人には、「継続は力なり」の言葉を感謝を込めて贈りたい。

山田監督には浅草の下町がよく似合う。吉永小百合も東京の下町生まれだから、吉永扮する神崎福江は足袋職人だった夫の死亡後、隅田川沿いの“向島”にある“かんざき”で今、どんな生活を？大会社の人事部長をしている一人息子が、久しぶりに「こんにちは、母さん」と実家に戻ってみると・・・？

新聞の社会面では老人の孤独死のニュースも多いが、８０歳近い福江は青テント向けのボランティア活動に精を出している上、ひょっとして“老いらくの恋”も・・・？父親には口も聞かず、祖母の家に入り浸っている“隔世遺伝”らしい美人の孫は、それを歓迎しているようだが、そんなバカな！

フーテンの寅さんを取り巻く、葛飾柴又の人々の“人情劇”も面白いが、人事部長として日々苦悩している息子は、母親や娘からどんな刺激を受け、どんな決断をするの？それに注目しながら、最後には８０歳近い福江が見せる“失恋”の姿に注目！フーテンの寅さんは毎回、恋愛騒動を繰り広げた挙句、マドンナとの失恋で終わってしまうが、本作に見る福江の“老いらくの恋”の行方は如何に？『卒業』（６７年）のラストのような、あっと驚く展開も・・・？

中国映画『こんにちは、私のお母さん』（２１年）は「涙、涙、また涙！」の名作だったが、本作も最高！“サユリスト”を自認する私ですら、吉永小百合は“演技のヘタクソな大根役者”、そう認識していたが、本作では芸達者な息子役の大泉洋、孫役の永野芽郁に囲まれてお見事な演技を。そんな本作に対して、私は迷うことなく星５つを！

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■継続は力なり！監督９０本目！女優１２３本目！■□■

２００２年７月に始まった『SHOW－HEY シネマルーム１』の出版から、２０２３年７月の『シネマ５２』まで、２０年以上にわたって映画評論本の出版を続けている私が自慢したいのは、「継続は力なり！」ということ。

その言葉をそのまま贈りたいのが、本作で監督９０本目となる山田洋次監督と、本作で出演１２３本目となる女優・吉永小百合の２人だ。私は中学時代から吉永小百合×浜田光夫の“純愛コンビ”の作品を見続けてきた。そして、２００８年１０月には某プロデューサーから、『まぼたい』こと『まぼろしの邪馬台国』（０８年）（『シネマ２１』７４頁）の公開を記念して「スカパー！祭り TV！吉永小百合祭り」で全３２作を一挙放送するので、私に「サユリスト」代表としてゲスト出演してほしいとの依頼が入り、出演したほどの“サユリスト”だ。また、山田洋次監督作品は１９６９年に『男はつらいよ』シリーズを開始する以前の、ハナ肇を起用した『馬鹿まるだし』（６０年）の時代から観ていた。そんな私は、吉永小百合作品との付き合いも、山田洋次監督作品との付き合いも約６０年になる。

『男はつらいよ』シリーズが終わった後の山田洋次監督は、黒澤明監督作品とは一味も二味も違う、切れ味鋭くかつ美しい『たそがれ清兵衛』（０２年）（『シネマ２』６８頁）、『隠し剣　鬼の爪』（０４年）（『シネマ６』１８８頁）、『武士の一分』（０６年）（『シネマ１４』３１８頁）等の時代劇から、“小津安二郎の再来”と思わせる、『東京家族』（１３年）（『シネマ３０』１４７頁）、『家族はつらいよ』（１６年）（『シネマ３７』１３１頁）、『家族はつらいよ２』（１７年）（『シネマ４０』未掲載）、さらに、『キネマの神様』（２１年）（『シネマ４９』１８７頁）のような超娯楽作まで、“何でもござれ”の活躍を続けてきた。

松竹出身の彼は当初、『下町の太陽』（６３年）を歌って、吉永小百合と二分する国民的人気となった倍賞千恵子を起用して『下町の太陽』（６３年）を撮ったが、吉永小百合とのコンビは、『男はつらいよ柴又慕情』（７２年）はあったものの、ずっと後の『母べえ』（０８年）（『シネマ１８』２３６頁）がはじめてだ。しかし、その時点では両者とも、日本国民の良心を代表する大監督、そして、日本国民の良心を代表する大女優になっているから、当然のように、『母べえ』に続いて、『おとうと』（０９年）（『シネマ２４』１０５頁）、『母と暮せば』（１５年）（『シネマ３７』１９５頁）でコンビを組むことに。

■□■“母３部作”第３作目の舞台は？人事部長の悩みは？■□■

しかして、９０歳を超えた山田洋次監督の第９０作目として企画されたのが、『母べえ』、『母と暮せば』に続く吉永小百合の“母３部作”の第３作になる本作だ。本作は大人気となった永井愛の舞台劇をもとに、山田監督が浅草の下町を舞台に、変わりゆく令和の時代にいつまでも変わらない親子の姿を描くものだ。

その舞台は『男はつらいよ』で今や日本中に知れ渡った葛飾柴又近くの墨田川沿いの下

町、スカイツリーが高々とそびえる「向島」だ。向島は、私も株式会社オービックの株主総会の後の打ち上げ会場として数回訪れたところだし、浅草は月一度の役員会の度に宿泊したところ。そして、劇中で福江（吉永小百合）が「一度は乗ってみたい」と語っていた墨田川の遊覧船も私はすでに体験済みだ。

冒頭、山田洋次監督がカメラに映し出すのは、スカイツリーが目立つ浅草の下町と福江の息子で、今は大会社の人事部長をしている神崎昭夫（大泉洋）が勤めている高層ビル群。私にはおなじみの風景ばかりだが、そんな状況下で山田監督が最初に描くのは昭夫のお仕事ぶり。２０２２年の NHK 大河ドラマ『鎌倉殿の１３人』の源頼朝役で複雑な人間関係を見事に処理してきただけに、名優・大泉洋は大会社の人事部長として同期入社の友人・木部富幸（宮藤官九郎）の相談にもうまく対処しているように見えたが・・・。

■□■向島にはこんな店が！向島での母さんの活躍ぶりは？■□■

私は弁護士登録後５年間は本来の弁護士活動の他、大阪国際空港公害訴訟の弁護団活動で奮闘していたので、土日祝日はもちろん、正月も GW も無しで働いていた。しかし、弁護士業務は、平日の夜の仕事（？）として、京都の祇園に行ったり、大阪のてっちり屋に行くこともある。京都の祇園は舞妓さんや芸者遊びが有名で、お座敷に座れば「これぞ京都！」という踊りを見せてくれる。しかし、私はその手の古風な京都のお遊びはあまり好きになれなかった。それと同じように、向島にも芸者衆の置屋があり、江戸の旦那衆は墨田川での川遊びの後、よく向島で芸者遊びをしたそうだから、向島には今でもそんなお店や芸者の置屋が揃っている。しかし、私は６０歳を超えてもやはり“その手の遊び”には興味がなく、むしろ風情のある向島や浅草の街並みを見学する方に興味があった。

しかして、木部をはじめとする会社の人事問題で日々の神経をすり減らしている他、妻との離婚問題や一人娘・舞（永野芽郁）との確執等で心の悩みをいっぱい抱えている昭夫が、久しぶりにぶらりと向島の実家を訪れたのは同期会を墨田川の遊覧船を借り切って豪勢にやりたい、という木部の提案を相談するため。「俺は無理」だけど、向島の主のような「かんざき」という足袋店を、夫亡き後も１人で営んでいる福江に相談すれば、何かいい知恵があるだろうと考えたわけだ。娘の舞は大学生だから、その父親の昭夫は５０歳前後、するとその母親の福江は７０代、間もなく８０歳（？）というところだが、昭夫が「こんにちは、母さん」と家の中に入ると、割烹着を着ていたはずの母親はえらく小綺麗なばかりか、昭夫の同級生だった番場百惠（枝元萌）や、スウェーデン人の夫を持つという琴子・アンデション（YOU）らと共に、イキイキとボランティア活動に励んでいたからアレレ･･･。今日は「かんざき」でその会議があるらしい。その会議に乗り込んできた中心人物は、教会の牧師をしているという荻生直文（寺尾聰）だが、これがイケメンで知識豊富、そして魅力いっぱいの人物だから、さらにアレレ・・・。自分にはろくに連絡も入れない娘の舞は大学の授業にも出ていないようだが、福江の元には出入りしているらしい。そんな娘は昭夫に、「おばあちゃんは荻生さんに恋をしている！」などと馬鹿げたことを・・・。

本作は山田監督作品らしくセリフが見事に構成されているが、美術にも最新の注意が払われていることがよくわかる。その１つがひときわ目立つ、明かりのついた「かんざき」の看板だ。これを見て「そうはイカンざき」と呼ばれていた、かつての公明党の党首、神崎武法を思い出すのは、私たち世代のサユリストだけ・・・？

■□■中国版も傑作だったが、本作も最高！■□■

近時の中国映画は『戦狼２／ウルフ・オブ・ウォー２』（１７年）（『シネマ４１』１３６頁）、『１９５０　鋼の第７中隊』（２１年）（『シネマ５１』１８頁）のような国威発揚型の戦争映画大作の大ヒットが目立つが、他方で『こんにちは、私のお母さん（你好，李煥英／Hi，Mom）』（２１年）（『シネマ５０』１９２頁）のような、涙いっぱいの傑作も多い。中華人民共和国駐大阪総領事館主催の「私の好きな中国映画」作文コンクールに「「タイムスリップもの」は面白い！賈玲監督の『こんにちは、私のお母さん（你好，李煥英）』に涙、涙、また涙！」と題して応募した私の作文は見事第３位に入賞した。誇張ではなく、同作は「涙、涙また涙」の傑作だったが、本作も最高！サユリストの私でさえ、女優・吉永小百合は演技のヘタクソな大根役者と認識していたが、本作では演技達者な大泉洋や寺尾聰の影響もあり、実にしっかりした演技を見せてくれているので、それに注目！

本作が最高と思えるのは、何よりも山田洋次監督の脚本の素晴らしさと、洗練された全体の演出のバランスにある。舞台が向島とされていることを強調しながら、遊覧船をうまくストーリーの枠の中に取り込み、全体の基調としては“老いらくの恋”（？）を老（福江）、壮（昭夫）、青（舞）の視点から、いかにも山田監督らしく描いたのが本作のミソだ。

『卒業』（６７年）では、導入部から大学を卒業したばかりの主人公を、恋人のママが誘惑するストーリーに胸をドキドキさせられた上、ラストの教会での“花嫁略奪シーン”に驚愕させられたが、本作でも“老いらくの恋”の当事者たる福江と荻生には、ラストに「ひょっとして・・・」と期待させるシークエンスが登場するので、それにも注目！

ちなみに、７月の第４日曜日は「親子の日」。それにちなんで、２０２３年７月２３日付読売新聞は２０面と２１面で、「ときめく母と、苦悩する息子。親子で見つけた幸せのかたちとは―」と題する本作の一大キャンペーンを掲載した。そこに書かれた「年齢を重ねても大切な「ときめき」」という項目は、女優業を約６０年も第一線で続け、今なお美しさと魅力を保っている吉永小百合なればこそのフレーズだ。神崎家では、祖母の福江も孫の舞も美人だが、長男の昭夫だけはおもろい顔だから“隔世遺伝”らしい。令和の時代に入った今、「昭和は遠くなりにけり！」の風景があちこちで見られるが、本作には「親子で見つけた幸せのかたちとは？」について、山田洋次監督の円熟の技でしっかり描かれているので、それをしっかり確かめたい。

■□■青テントの是非は？イノさんの生きザマは？■□■

かつて、大阪の中之島公園は“青テント”で埋め尽くされていたが、橋下徹大阪市長の登場と、周囲の反対を押し切っての原理原則に基づく強硬な“立ち退き請求”のおかげで、

今日では青テントは一掃されている。私が墨田川の遊覧船に乗った頃も、墨田川沿いの公園に青テントは見られなかったが、本作で福江や琴子、百惠たちが頑張っているボランティア活動の対象は、墨田川沿いの公園内で青テント生活をしている人たちだ。お弁当やお茶、さまざまな日用品等を青テントごとに届けていくボランティア活動は見上げたものだが、そのことはかえって彼らの自立を妨げ、青テント生活者を増大させているのでは？私にはそんな疑問が強いが、山田洋次監督も女優・吉永小百合も、そんなボランティア活動が大好きだから、本作に見る吉永小百合がイキイキしているのは当然。その上、そんなボランティア活動をしていると、荻生のような有能かつ魅力的な男性と一緒にいられるのだから、ボランティア活動の活発化と並行して、福江が綺麗になっていくのも当然だ。

そんなストーリー設定の中、青テント生活者の男として異彩を放つのが、田中泯演じる井上（イノさん）だ。生活保護の申請を拒否し、「役所の世話になるくらいなら、死んだ方がマシだ」と啖呵を切る姿は見上げたものだが、それなら彼は、青テントで公有地を不法占拠していることをどう考えているの？私にはそんな論争を挑みたい気持ちもあるが、それはさておき、本作に見る山田洋次監督と女優・吉永小百合の“弱者に対する温かい思い”を率直に受け止めながら、イノさんの生きザマについてもしっかり考えたい。

■□■息子の選択は？母さんの選択は？■□■

現在放映中の NHK 大河ドラマ『どうする家康』では、毎回、松本潤演じる徳川家康の選択の姿が興味深い。７月２３日放送分に見る“信長殺し”の選択にはビックリさせられたが、会社のリストラ方針に対して、昭夫が協力したと知った木部の怒りを、昭夫はどう受け止め、木部をどう説得するの？導入部から中盤にかけてずっと続く、大学時代同期だったこの２人の“ドタバタ劇”を見ていると、誰の目にもそこでは木部のワガママが際立っている。したがって、ほとんどの観客は、人事部長という辛い立場の中で退職金の割増等に最大限の努力をしている昭夫を支持するはずだが、本作ラストに見る昭夫の選択は？

『男はつらいよ』の主人公・車寅次郎は、妹のさくらが工場労働者と結婚し、貧しいながらも幸せな家庭を築いているのに対して、どう見てもフーテン男。いくらカッコをつけても、一人ぼっちは寂しいし、一人で野垂れ死にする運命もわかっているはずだから、多くの男は寅さんのような気楽さ、自由さに憧れつつ、彼のような選択はできない。二流（三流？）大学の卒業ながら、大会社の人事部長にまで出世している昭夫なら、なおさら“わが身の保身”を考えるのが当然だ。しかして、本作ラストに見る昭夫の選択は？

他方、前述したように『卒業』では、あっと驚く結末にビックリさせられたし、役所広司と黒木瞳が共演した『失楽園』（９７年）でも、原作通りの“心中”という結末はあっと驚くものだった。しかして、せっかくいい仲（？）になってきたのに、突然、荻生から北海道の北の果ての教会に赴任すると告げられた福江の選択は？「私も連れて行って！」。それが言えたらすごいが、さて・・・？

２０２３（令和５）年７月２８日記